＼鶴岡市地域おこし協力隊 OB　特別対談／

『地域と関わり続けるだけで素晴らしい』

協力隊の任期終了後も協力隊時代の任地に暮らすお二人に
地域での暮らしや、鶴岡市の協力隊に向いている人などについて聞いてみました。

石井孝治さん（29）

三川町（山形県）出身。2016 年から 2018 年の協力隊時代には、焼畑あつみかぶを使った新商品開発と、木野俣いきいき隊活動のサポートなどを行う。現在は「株式会社あつみ農地保全組合」で温海地域の休耕田を活用した農業をしている。

田口比呂貴さん（34）

大阪府出身。2013 年から 2016 年の協力隊時代には、地域での草刈り、雪下ろしなどの野良仕事をやりながら、お茶のみサロン、各種イベントのサポートを主に行う。3 年目には民俗誌『大鳥の輪郭』を刊行。現在は地域の野良仕事を継続しつつ、個人では大鳥地域の民俗調査や狩猟採集、山菜/茸の通販&Web メディア〝大鳥てんご〟を運営している。

― 任期終了後も地域に定住している理由

田口：石井君はどうして定住しているの？

石井：僕は、ただただ居心地が良かったから（笑）
３年間の中で、自治会の役員の人や若手の人たちとのつながりが増えて。ここの人たちと一緒にいたら面白いことできるだろうなぁ、と思いました。自分の実家も長男が継ぐことになっているし、自分の居場所は？となると、「俺、このまま福栄に居てもいいかな」っていう感じです。

田口：石井君は現役の時に焼畑をやっていたよね？
興味あることをやらせてもらえる環境にあったっていうのも大きい？

石井：そうですね、協力隊時代が結構フリーでよかったです。耕作放棄地が増えている地域だったので、農地はいくらでも貸してもらえる、という感じで。やったらやったで、草ボーボーにして怒られたり、いろいろありました。言い合いになったり、助けてもらったり、いろんなことを経て「ここにいたいな。いてもいいな」と思うようになりました。

田口：「これがキッカケで任期後も住むことにしました」というよりは、暮らしていく中で地域との関係性が築かれていった、ということかな。

石井：そうですね。決め手というのはないです。そのままの流れ、みたいな。

田口：自治体が協力隊を募集するときは、自治体ごとに特徴があって、こんなことができますとか、こういう環境を用意します、PR 上手な人来てください、観光誘致が得意な人来てください、とかいろいろなやり方がある。鶴岡市の場合はしっかりした受け皿とある程度のフレームを整えつつも、「地域に住みながら自分でも何か見つけてみてください」みたいなところがあります。見えにくいチカラにゆだねている。その、山の暮らしとか、地に足の着いた暮らしに魅せられていく人もいるんじゃないかなと思うんですよね。

石井：協力隊がいる他の自治体って、住む場所と活動地域が違うことあるじゃないですか。鶴岡市はそれがほぼないのが特徴だし、地域になじみやすいのかな思います。

田口：居住地と活動地域が近い場合が多いね。だから、感情の浮き沈みを普段からバチバチぶつけ合うことが僕にもあったし、石井君にもあった。それが、お互いの溝を埋めることにも、広げることにもなりうるし。裏表ではあるから、一概にいいとも言えないね。

石井：そうですね。嫌でも、仕事以外でも顔を合わせる。なので、溜めすぎると息が詰まってくる。協力隊っていうよりも、一住民としてこっちも付き合うというか。そうしていかないとこっちもパンク

するなと思いました。でも、本当は言い合いたくはないですよ。

田口：冷静に話し合って進みたいよね、本当は。建設的な話をしたい。だいたい向こうが感情的になってくるんだよね（笑）

石井：そうなんです（笑）それで何回も来られると、こっちも感情的になる。そりゃそうですよね。争うのがいいわけではないけれど、そこまでの関係性になれるっていうことは良いことだと思います。

田口：地域にも守りたい暮らしがあって、それは明日も明後日も田畑や山と暮らしていきたいという願いかもしれないし、今更ヨソでは暮らせないという保身なのかもしれない。だから、ここで生まれ育っていない新参者とはどうしても感覚な違いはあるよね。地域の人たちから教わることもたくさんあるし、返しきれないほどの恩を受ける。一方で、違和感から来る「これ、こうしたらもっと合理的なのにー！」という提案は、大先輩たちの前では空を切ってしまうことがしばしば……。「なんでやねん！」って内心思って溜め込んで、仕事が手につかなくなって。一人で自爆してたよ（笑）

でも、地域には歩んできた歴史があるし、私有地と共有地みたいな目に見えない線もある。そういう背景やルールを、地域活動を通じて覚えていくと違った側面が見えてきて、身の置き方もなんとなくわかってきたかなーと。僕の場合、地域に慣れるまで３年かかったけど……。

それに、地域も、外の人が入ると少しずつ変わっていく感覚がある。それが地域にとって良いことなのか悪いことなのかはわからないけど。ただ、自分が将来もそこに居るってことを前提にして、少しでも自分たちや次に続く人が暮らしやすくなるように変えていきたいっていう意思表明があったんだと思う。それは石井君の住む地域にもあるんじゃないかなって思うし、僕の地域にもある。

　自治会や消防団、地域づくり組織は、体制やルール、事業は少しずつ変わりながらも、昔から続いてきた。それを「続けていること自体がスゴイ！」という見方もできる一方で、「役職を担うのはしんどいけど任期が終わるまで耐えればいい。事なかれでいこう」みたいなところもある。地元の方々は「若い人たちに今まで俺らが背負ってきた荷物（役職）を背負ってもらいたい」と思っているけれど、そもそも若者の数が少ないので、どこかに絞って組織を再構成していく必要がある。今は年齢構成上頭でっかちになっていて、若者の言葉が汲まれにくい構造になっているのが問題で、それは何とかならないかなぁーと思っています。

石井：どこもそうですよね。

田口：うん。本当は現場の人がもっと生き生きするようにしたいけど、現場に来ない役員が事業の細部にまでいちいち口出しするのは良くないと思う。

石井：世代交代があって、今の自治会の人たちがだんだん変わってきたらどうなっていくのかなっていうのは今の木野俣にはありますね。

田口：わかりやすいのは、伝統芸能。獅子舞とか。若い人が中心でやるものだとすると、世代交代とか、現場の意見が大事にされそうな感じがする。そこが突破口だったりするのかなって思う。大変だろうけどね。

石井：うちの獅子舞は逆ですね。上の人たちが、変化したほうがいいんじゃないかって言う。でも現役は、その文化を崩したくないって姿勢で、それもおもしろいなぁと思って見ています。

― 地域おこし協力隊として鶴岡市に来てほしい人物像とは？

田口：地域の生活に敬意を持てる人がいいんじゃないかなと思う。協力隊としてやるべき仕事はやりつつも、生活も地つなぎであって、共同作業もあるし、寄り合いもある。地域の中の密なコミュニティの面倒くさい部分もあれば、お裾分けという恩恵もあったりする。それをトータルで見て、地域の人たちが繋いできた土地の使い方とか、生活に活かしてきた知恵とか。そういうものに敬意というか「いいな」「すごいな」と思える人だったら、きっと合うような気がします。その土地で協働し合いながら生きてきたこともそうですし、山、海、水の恵みを生活に取り入れてきた暮らしに、興味や敬意を感じられると、きっと合うのではないかと。

石井：確かに。その気持ちは重要ですね。その地域の文化や暮らしを尊重したり、いいなぁと思える人のほうが馴染めるかもしれない。普段の暮らしから発見が多いし興味があるから地域の人に聞いたりする。それがコミュニケーションになっていく。僕も山の育ちじゃないので、山の暮らしは楽しいな、最高だなという気持ちがありました。

逆に、新しいことを、自分流でドンドンやりたい人とか、地域活動をメンドクサイと思う人は合わないかもしれない。集まりとか行事とか全てにおいて。僕も面倒くさがりだけど、最低限はやっています。

― 協力隊は地域にとってどんな存在か

石井：僕はもう全力で地域に染まっていると思います。２年目の時から、地域の人に「石井君って１０年目だっけ？」って言われていました。一番嬉しかったのは、「あど住人だ（もう住人だよ）」って地域の人に言われたこと。遠慮があって、話し合いに混ざるのを躊躇していたときに、そう言ってもらえたのが嬉しかった。地域の一員として認めてもらえた感じがした。地域に何を残せたのかもまだわかりませんし、ゴールはわかりません。地域で暮らし続けていることが正解なのかもわかりません。それと、全国的にピックアップされているような協力隊の成功事例がゴールだと思っている人が多い気がする。起業をしたりすることが協力隊としてのゴールだと思っているような。でも僕は、それだけがゴールではないと思います。任期終了後は赴任地を離れまちなかで暮らしている元協力隊員もいますが、今でもお祭りのときは必ず来ます。地域との関係性が任期後も続いているっていうだけで十分素晴らしいことだと思います。